

方  
備  
作  
諸  
事

地



蘆雁集序

劉禹錫は冬泰山をめぐりては

詩をよみ、荆山をめぐりて及ん

ず乃外、濤をめぐりて、終る九

あはれに、乃る更に詩をよみ

振るる志、乃る更に詩をよみ



電話 〇三三三 一七 〇六五四 港	下垣内和人	吳市阿賀北五丁目三番八号
		〒737

人々を以て一統と爲す。故に天下に  
其の徳を以て尊ぶる者多し。夫れ  
古の友人曰く、先子の梅翁は、  
福をむけ給ふに、其の徳を以て  
社稷の爲に傳へ、數卷の書に  
述べて、梓人乃世人の子、維口を以て

其の徳を以て尊ぶる者多し。夫れ  
古の友人曰く、先子の梅翁は、  
福をむけ給ふに、其の徳を以て  
社稷の爲に傳へ、數卷の書に  
述べて、梓人乃世人の子、維口を以て

樂をよみし者等を監したる朝を  
蒙るべきにいとをまへ

保庚の遺文

備前

平山、人餘穆誌

平四

志す所の古人よりやかりて  
ゆき人あけにけりしきも  
抑するのいふもたのふり  
かむし抑するのいふも  
梅おのけりしものいふ  
はかすよすしはよすし  
休みのけりしものいふ  
ちかすよすしはよすし



花の枝のまはりにあはれ合は  
けりまゝもふもはは  
呉松の歌乃廣れ道本も  
まはれまゝふもははのま  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ

ハナをこゝろてまゝ  
小豆のけのほむに  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ

大徳山  
梅室

あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ  
あまらふのまはれまゝ

集の筆子人たる風の如て  
しめぬ其の鞋に履きたる  
おろくそたふし物なり故の上  
仰と申すれども立ちたる言  
をの信するに思はれぬ一人  
物にこそ思ふて取りあはれけ  
きなりぬ其の心もあはれを  
たははらうそかこて物事  
る

はるすれぬ風の如たる  
しめぬ其の鞋に履きたる  
おろくそたふし物なり故の上  
仰と申すれども立ちたる言  
をの信するに思はれぬ一人  
物にこそ思ふて取りあはれけ  
きなりぬ其の心もあはれを  
たははらうそかこて物事  
る





るのふらふらと  
ほかほか  
はなはな  
はな

梅

ふらふらとほかほか

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅

ふらふらとほかほか

梅





はかばかしく人の心をなやませぬ家  
しつぱなはたかきつる業ぶの事  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
けいけいけいけいけいけいけい  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事

いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事  
いひおこしおこしおこしおこし  
ささくはたかきつる業ぶの事

新た来事きぬと所念  
 けしふふ方たる心きめ并  
 店之れらきむとふと以  
 けしむおとぬ珠のす均え  
 白粉うわたりと人れかす  
 けしむとくつとて居鴨子未度  
 けしむとぬ月此とぬとそ  
 けしむとぬとくつとぬとぬ

念 撫 念 撫 念 撫 念 撫 念 撫

嫩林をつくそとくかす水  
 けしむとぬのけしむとぬとぬ  
 けしむとぬとぬとぬとぬ  
 けしむとぬとぬとぬとぬ  
 けしむとぬとぬとぬとぬ  
 けしむとぬとぬとぬとぬ

念 撫 念 撫 念 撫 念 撫 念 撫



系とて入さおてたは  
草中よりつめて啼ぬ  
そのふとよしくわく  
をいさよと水の足と  
あいらさよと入るや  
くさちかきよよの  
年をさよとよよと  
泣きのよとよと

泣きのよとよと  
あいらさよと入るや  
くさちかきよよの  
年をさよとよよと  
泣きのよとよと  
あいらさよと入るや  
くさちかきよよの  
年をさよとよよと

字はよゝ又是も極

は曲み何れも力けす

かろくはちのこも小強なる

こゝろもやふり強かしく強

はるるるるるるるるるる

ちく申能と

梅屋

との心もさうさうとさうさうの目

縁より程程のちかちか

花能

お摺り家もいはい舞へる舞へ

日替

のり瓶いづるはあはれ道りあ

宝

飯何のころもさうさうの利あ

的

まじりまじりまじりまじりまじり

花

原川の縁もさうさうの代

宝

いふもいふもいふもいふもいふも

詞

はるるるるるるるるるる

花

いふもいふもいふもいふもいふも

宝



毛體の好むもの一は  
筆の速くその力に  
人老し其の鼻の通りに由り  
若くは其のよき筆に  
古翰の毛力も好む  
か人の癖にその印  
もその好むもの  
紙の好むものを好む

毛 筆 好 筆 好 筆 好 筆 好 筆

本筆と其の中を  
好むものは其の  
かよふ所を好む  
厚くよき筆を好む  
汗かき其の通りに由り  
よき筆を好む  
よき筆を好む  
よき筆を好む

毛 筆 好 筆 好 筆 好 筆 好 筆

踏まへしは寝供の如くを以て  
後より中へても好れ集る  
自らを去へてかゝるを他は  
おろそかにしやとあふ  
ゆゑにぬかす世と世よりゆ  
陶 公をいふまゝに  
まゝの形事ふえり年くふ  
様も免るゝと信よとの事

木 花 洞 宝 花 洞 宝 花 洞 宝

笑まざるまの娘は心を  
おろそかにしてたゞ  
おろそかにしてたゞ

木 花 洞

おろそかにしてたゞ  
おろそかにしてたゞ

木 花 洞

おろそかにしてたゞ  
おろそかにしてたゞ  
おろそかにしてたゞ  
おろそかにしてたゞ  
おろそかにしてたゞ

木 花 洞 宝 花 洞 宝 花 洞 宝

いしききのおひのうらふまぬぬ  
すのふたて式をいふ  
舟のまじりたるけりけり  
いかにたをぬまは  
あつたふらぬまのあつた  
めえらるて風のやま  
持てのふらふはくまのけり  
あつたふらぬまのあつた

いしききのおひのうらふまぬぬ  
すのふたて式をいふ  
舟のまじりたるけりけり  
いかにたをぬまは  
あつたふらぬまのあつた  
めえらるて風のやま  
持てのふらふはくまのけり  
あつたふらぬまのあつた



梅家

十方おかしきと申すは、

文瑞

さきかたきけしん

さきかたきけしん

定

さきかたきけしん

瑞

木枯く、餘録ありて

定

此方と云ふは、

瑞

一丁あつちきさる

定

あつちきさる

瑞

あつちきさる

定

あつちきさる

瑞

あつちきさる

定

あつちきさる

瑞

あつちきさる

定

あつちきさる

瑞

ふくらむ能あるものへ會つて  
くさくさき摺のつらきぬか  
る起の指を是より引き  
細くするにせぬれば是を  
うぢまゝに流しぬるを捨  
棄すべしとの言ふ事いかに  
流す事かたしめられ精進の  
かたむらぬればはきぬか

室 琴 室 一 琴 室 琴 室

ふくらむ能あるものへ會つて  
くさくさき摺のつらきぬか  
る起の指を是より引き  
細くするにせぬれば是を  
うぢまゝに流しぬるを捨  
棄すべしとの言ふ事いかに  
流す事かたしめられ精進の  
かたむらぬればはきぬか

室 琴 室 一 琴 室 琴 室



新製の東まきしんじょう  
美ら山とよの山  
あつたふたこの山  
らりぬいし山  
あやくとる山  
下ふ山  
小雨ふ山  
いよ山

作方て山  
らり山  
あつた山  
らり山  
あやく山  
下ふ山  
小雨山  
いよ山



葉をみとぬはしきまの道まな  
大寺ふ住人あつたあつ  
孫子の孫はまゝのり終家の飲  
何々の小水端みそをる  
魚よりうすうすなる月のせ  
此猿のやう小水端とあつた  
瀬川と私の習字をひくあつ  
福もきくく徳やにらる  
山 山 山 山 山 山

古くより神祇の外の志を  
一途余田と訓一とさし  
たつた信てんあつたのをも  
たつた信てんあつたのをも  
山 山 山

株をふとぬあつた  
積山をふとぬあつた  
山 山 山

一  
一

自代を名取ぬるを擧げて  
からくしとゆふふの牛  
割りけしと云ふて改て  
おかしと云ふて梅もし也  
新つ子紙を名取たる  
さすのおかしぬのわさや  
一息の呼吸をわさやの  
ささかむしとて又折るか  
る

甲斐のあまのつとむし  
こけおろしと云ふて  
さすおかしぬのわさや  
甲斐のつとむしと云ふ  
身代をとりと云ふて  
さすおかしぬのわさや  
さすおかしぬのわさや  
さすおかしぬのわさや  
さすおかしぬのわさや  
さすおかしぬのわさや  
さすおかしぬのわさや



もまゝいふまゝいふはうらなひのふき  
地をのこしてのみまはるる

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

るる修源恨難

大りお小りお心丸京師とてまゝ

け掃のこておろまろむ白糸

あゝあゝお心まゝや深きか

けうまゝいふらんおろてまゝ

あゝあゝお心まゝとておのこ

お心まゝとてお心まゝとてお心

人まゝとてお心まゝとてお心

人あきの止しとてあきの歌一了  
 春の会の終つてやまをたふす際  
 ねまけりくやわけてるまふかきま  
 下一踏のまのまふくひ入る者うけ  
 御座るまをなまけりてはね  
 梅あつてまふかきのまのまおと  
 いたるまのまのまのまのまのま  
 ねくまのまのまのまのまのま  
 梅あつてまふかきのまのまおと  
 いたるまのまのまのまのまのま  
 ねくまのまのまのまのまのま

まふかきの止しとてあきの歌一了  
 春の会の終つてやまをたふす際  
 ねまけりくやわけてるまふかきま  
 下一踏のまのまふくひ入る者うけ  
 御座るまをなまけりてはね  
 梅あつてまふかきのまのまおと  
 いたるまのまのまのまのまのま  
 ねくまのまのまのまのまのま  
 梅あつてまふかきのまのまおと  
 いたるまのまのまのまのまのま  
 ねくまのまのまのまのまのま

終る所は由きぬや様の人  
 一人様を雨ふきほらう  
 主のねやゆり起すんであう  
 所申さぬうひつほや初あ子  
 新築うらるあぬや子作の中  
 井戸くけい子ゆきほきほ  
 まく扱や種まきと新し  
 押合うて扱向きく様う申

一也  
 扱白  
 新築  
 自説  
 河野  
 而所  
 若山  
 扱子

尾路

向しがし毎けうもさうり心さう  
 せうるう新うぬらやうの月  
 えの向うりてまきまの  
 さまのやあよりりて  
 う新うまの山くやをむの  
 ろくうあうまきまやあ  
 向うまを志うりまうけ  
 けうまの二人とまうけ

身代  
 後ま  
 治文  
 新築  
 まま  
 向う  
 考の

山崎のふきまき

江戸

田山

浦のふきまき

浮世

風のふきまき

風朗

本人のふきまき

一鼻

ふきまき

目星

ふきまき

中野

ふきまき

拾得

ふきまき

夷則

ふきまき

笑

ふきまき

透

ふきまき

山

ふきまき

山

ふきまき

山

ふきまき

山

ふきまき

山

ふきまき

山

河原へつゆをまけり梅の水 庭信

梅をまけり水はくみぬ梅の水 未木

つゆをまけて川を流す水はくみぬ梅の水 素撰

つゆをまけて川を流す水はくみぬ梅の水 廣島

つゆをまけて川を流す水はくみぬ梅の水 諸物

つゆをまけて川を流す水はくみぬ梅の水 聖徳

つゆをまけて川を流す水はくみぬ梅の水 人研

つゆをまけて川を流す水はくみぬ梅の水 固束

実の飜波をみる梅の水 梅意

実の飜波をみる梅の水 徳二

実の飜波をみる梅の水 南島

実の飜波をみる梅の水 三子

実の飜波をみる梅の水 梅に

実の飜波をみる梅の水 素撰

実の飜波をみる梅の水 子研

実の飜波をみる梅の水 素撰



高き山に上りて見る所の景

一様

山頂の夕陽を望む所の景

朝霞

山頂の夕陽を望む所の景

夕霞

山頂の夕陽を望む所の景

月夜

山頂の夕陽を望む所の景

雲備

山頂の夕陽を望む所の景

雲霧

山頂の夕陽を望む所の景

清田

山頂の夕陽を望む所の景

雲霧

水もたれぬおぼゆる所の景

陸路

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

水もたれぬおぼゆる所の景

疎るまやをきりて 傳ふれ申の糸  
 名人のふくまの 障むれりるう水  
 不初のまきめをきりてみりて  
 向極山あるし 暮き月の中  
 雪城さふまや 障むの科理原  
 小まややまきりて ぼりてし  
 雪上ておるまきりて 川園さ  
 なるりておるまきりて なるりて

眉葉  
 亮燈  
 高き雨  
 双宿  
 完統  
 批場  
 急足  
 馬車

起きけりて なるりて なるりて  
 花のまきりてのまきりて 携りて  
 初うけりて なるりて なるりて  
 雨のまきりて なるりて なるりて  
 一休めありて なるりて なるりて  
 去此列ぬ なるりて なるりて  
 鳴るまきりて なるりて なるりて  
 美舟やなるりて なるりて なるりて

木上座  
 茶室  
 障む  
 香出  
 土上  
 可月  
 人系  
 又裡

持のきよとふるも 松をう 柏保 朱至  
 葉をけて花より きのうの力さし ちよと  
 懐く 卯のさし 也くのまきう 水  
 白きくさるのまや ぬのの 露生  
 松の條とつて なる ぬりぬ 是を  
 火を打てりて なる ぬりぬ 美を  
 けり ぬりぬ 水の白を やせのぬ ゆき 八藤  
 ふらふらと なる ぬりぬ 花を 花 花  
 花を

ぬきをぬりぬ ぬりぬ ぬりぬ 花に  
 水のきよと 持も なるの年 ぬりぬ  
 水ぬりぬ なる なる 多圃  
 ぬりぬ やんも ぬりぬ ぬりぬ 涼呼  
 なる なる やんも 竹の 伸 是公  
 なる なる の なる ぬりぬ 是磨  
 なる なる なる なる なる 是磨  
 なる なる なる なる なる 是磨



一書にたゞのりて一花に

おのり

花にまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじりて花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

花のまじり

水吹てきやきやのきり  
 小のよれくく入りや  
 新くてたるときき  
 けはのりくしん  
 扱てきめきんや  
 みるねをきりて  
 新陰やう  
 世とこれのよき相  
 伊予  
 印  
 下  
 白  
 雲  
 葉  
 映  
 丹  
 花  
 後  
 花  
 枝

ちる花よきやは  
 こけきぬか  
 扱てのちり  
 うとさ  
 赤玉の  
 海  
 乾川  
 る白  
 化  
 友  
 新  
 月  
 赤  
 珠  
 美  
 珠  
 山  
 月  
 珠  
 空  
 玉  
 葉  
 映  
 丹  
 花



さし置や持木田子の物

木まりのまのあけを

人あふぬきゆるるに

ゆて行ぬとけふふて

あややあやしく止すぬ

まぶるまぶるまぶる

○

四つ橋よ一木まぶる

初々

杜海

持五

芝草

美則

年六

梅家

福まける一羽さうや

吹所たき一高きや

やうやとくくまの

あまきけてゆの

又野入りのさう

所てまじりぬ

備へるゆき

あさて

福美

吹所

やう

あま

又野

所て

備へ

あさ



花の香をかくすもさるるも  
新子に新金ふりのめらるる  
早ゆきとてふるやまのる  
あややまののりし海をのり  
新く夜のさるもさるる舟のり  
解るや久しく新く地のり  
かゝるいさる果るさるる舟のり  
雨ふりてさるるさるる花のり

柳屋  
松屋  
飯之  
枕之  
香之  
舟之  
果之  
花之

まもりの下はさるるさるる  
海はさるるくさるる舟のり  
さるるのさるるさるる舟のり  
さるるのさるるさるる舟のり  
さるるのさるるさるる舟のり  
さるるのさるるさるる舟のり  
さるるのさるるさるる舟のり  
さるるのさるるさるる舟のり

柳屋  
柳屋  
柳屋  
柳屋  
柳屋  
柳屋  
柳屋  
柳屋

さくら島の津守中へ渡り、世帯に  
向うは津守と云ふ所とのほまじ  
かかして、種多きも小松、先  
・みの竹、さき、し、さき、甲、せ、せ、  
小ぢ、さ、の、ま、さ、け、り、さ、り、さ、り、  
此の御止、さ、の、う、え、系、さ、り、  
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
折、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、

風月  
るを  
更な  
松古  
負山  
舞足  
本子  
相を

入て、一、つ、の、の、ま、さ、り、  
折、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
の、の、入、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
ゆ、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
折、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、

素こ  
二、折  
益、益、  
困、  
法、  
ま、  
子、月  
美、業

竿竹もろくくしはきやまのこ  
新橋の行のりして代山の  
そふゆふまゝの家のまゝ  
屋をまゝのまゝのまゝ  
おれをまゝのまゝのまゝ  
是るまゝのまゝのまゝ  
古々のまゝのまゝのまゝ  
藤のまゝのまゝのまゝ

紫風  
碎糸  
六く  
瓢每  
臥重  
貞雪  
教外  
眉岳

竹のまゝのまゝのまゝ  
吹くまゝのまゝのまゝ  
町まゝのまゝのまゝ  
柳まゝのまゝのまゝ  
おれまゝのまゝのまゝ  
味まゝのまゝのまゝ

東原  
流志  
佳峯  
五穀  
丁権  
祇白  
舟桂



とよまひん料とてふとせりまはるも  
あふ一冊のまゝとてふとせりまはるも  
とよまひん料とてふとせりまはるも  
あふ一冊のまゝとてふとせりまはるも  
とよまひん料とてふとせりまはるも  
あふ一冊のまゝとてふとせりまはるも

とよまひん料とてふとせりまはるも  
あふ一冊のまゝとてふとせりまはるも  
とよまひん料とてふとせりまはるも  
あふ一冊のまゝとてふとせりまはるも  
とよまひん料とてふとせりまはるも  
あふ一冊のまゝとてふとせりまはるも

とよまひん料  
あふ一冊



